抗験奇方 初美晒里

第一髪の垢を去てさらくとなり
毎日洗ふに不及して垢を去事妙なり

一包 三十六文

○夫女ハ髪の艶黒きを宜しとす其角が句にも青柳の額の撫や三日の月と云ある
髪を賞ぶるハ雨の柳の[illegible]艶ある髪の事おもく婦人の髪の毛ハ
化粧の第一にして尤大切の物なり然るに壮年元気の強き頃ハ粗略にする人多くあり
また女中方の通例ニて毎の道の髪結稼ぎもありて髪の毛に福ぞりを生じ垢付積り
たる摺にあり殊に垢瘡性の人々ハ男女ともに髪の中虱が如く痒を発せる事甚
しく三十日に二三度づゝ髪を洗ひそれより又あらためて解難あれバ御人あり
病気全快後も乱髪梳櫛の歯を入がたく椿の油ハ髪の毛を枯して白髪になるもの
大病なりとも必しも用ゆべき事あらず又々梳の油を付る時ハ自然と髪の枯つ
也是赤毛白髪となるハ遠からず是も初に云ふ業と云神仙の傳ふるもあらず
御夢想ありて古風である事が医道を学び節の良医斎藤祐仙翁の
さづけらるゝ妙方なり彼祐仙翁の壮年節髪の毛に頸垢を生ずる変毀の上
雪の霜を置がごとし依之和漢の医書を操へ漸く法をさぐり自製
しくる試らるゝ頭垢を去事神のごとく忽ち其患ひを忘る首髪の
艶を出しみどりの色をまし夫より他人にも施して則業の名目を
初みどりとぞ名付けり兵くハ能書を讀せたまひて法の如くにこれを用ひ
即功ある良薬たる事を知りたまへかしといふ

江戸戯作者 御ひいき清別涼の

狂訓亭 為永春水精製

東都 齋藤祐仙翁傳方

清浄の涼しくきり手にて
実に髪の毛をうるほし[illegible]

長生不老 潤身丸

梅暦元版元
書物問屋

京橋南方弥左エ門町東側中程

文永堂
大嶋屋傳右衛門